琉球大学学術リポジトリ

原稿：「蘭領東印度」

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2018-04-16 キーワード (Ja): 矢内原忠雄 キーワード (En): Yanaihara Tadao 作成者: 矢内原, 忠雄 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/38059

矢内原忠雄文庫

史　料　名	矢内原忠雄原稿 第二巻「蘭領東印度」書評2～18頁
封筒番号	198
原文所所蔵者	琉球大学附属図書館
撮影年月日	平成 17 年 11 月 10 日
撮　影　者	富士写真フイルム　株式会社
備　　考	

矢内原忠雄文庫

封筒番号： 198

史料名	矢内原忠雄原稿 第二巻「蘭領東印度」書評2～18頁
資料形態	B4原稿用紙
枚　数	
頁　数	0
縦（cm）	
横（cm）	
厚さ(cm)	
書誌的事項	南洋 今泉分類記号： Y

琉球大学附属図書館

「東西の接触」
「指導者の使命」
「西洋の精神」
「東洋の精神」
「文化の融合」

第一巻は「緒論」の外、
第二巻は特に「東亜印度」の植民政策を論述する。

「古代」
「東洋諸国の近代化」
「植民地の発展」
「將来の指針」の諸章を含む。

此の目次を見ても大体見当つくであらう如く、本書は植民政策の中心問題の現勢に関して文化融合の問題を論述して居る。

遠慮し、著者の諭旨の大　を紹介し且つ批評するに止めよう。

著者は植民国政策使命に対する観念は長き発展の歴史を経たる後今日に於ては現代の全人類的思潮に伴ひ主として教育にあり、若くはなりつつありと見る（一一三頁）。即ち十九世紀末の頃植民地統治は白人の重荷であると言はれた如き思想は宣言せられて、国際聯盟規約の委任統治制度に明記せられたる文明の神聖なる使命たる思想となつたのであり、その

の聯盟規約第二十二条に所謂「近代世界の激甚なる生存競争状態の下に未だ自立し得ざる人民の居住するものに對しては該人民の福祉及発達を計る」との文明の神聖なる使命をば著者は『指導者』（leadership）と呼ぶ（五三頁）。このleadershipこそ著者の植民政策の根本観念である。

植民地問題は東西文化の接触の必然の結果であり且つその融合が植民政策の目的とする処である。西洋の組織、技術、及科学の援助

東京　文房堂製

に よ つ て 西 洋 の 凡 て 善 良 な る も の を 含 有 す る
建 造 物 を 建 設 す る こ と は も は や 白 人 の 重 荷 と
し て 考 へ ら る べ き こ と で な く、 全 人 類 に 取 つ
て の 課 題 で あ る と 考 へ ら れ る。 日 本、 支 那、
暹 羅、 ト ル コ、 及 ペ ル シ ヤ の 政 治 家、 指 導 者
、 思 想 家、 イ ン ド 及 イ ン ド ネ シ ア の 統 治 者
、 官 吏 及 酋 長 は こ の 精 神 に 於 て 共 同 し、 既 に
今 日 ま で 進 捗 し 且 つ 遂 に は 両 世 界 の 調 和 を 意
味 す る で あ ら う と の 東 西 西 洋 の 接 触 を 完 成 す
べ き で あ る。 何 と な れ ば 遂 追 求 せ ら る べ き 野

心 的 目 標 は 此 の 事 に 存 す る の で あ り、 こ の 事 以 下 で は な
い。 斯 く の 如 き が 植 民 政 策 に 期 待 す る こ と
ろ の 偉 大 に し て 高 貴 な る 仕 事 で あ り、 又 こ の
基 礎 及 文 化 を 形 成 す る も の で あ る」（九一頁）。

そ れ が 少 な く と も 東 西 西 洋 精 神 の 特 色 を 論 此
し て、 西 洋 精 神 の 特 色 は 個 性 の 尊 重 と 活 潑 な
る 企 業 心 と に あ り、 ~~[illegible]~~ 又 は 独
自 に 社 会 的 東 洋 精 神 の 特 色 は 共 同 的 忠 誠（communal
loyalty）で 静 的 社 会 組 織 と に あ り と 考 へ、 而 し て
東 西 文 化 の 綜 合 は 東 洋 社 会 の 動 的 化 の 政 策、

その集団的忠誠、動的社會化による精神的及物質進歩の発展との結合にありと為す（一〇三、十六六頁）。西洋の精神と東洋の精神とは異なる形式であるとしても優劣を示すものでなく、従って抑壓若くは破壊することが西洋精神の意思ではない。寧ろ東洋精神の水平線を擴大することを欲するのみである。」

西洋人は五人の強力と知識と、強に進歩に対する五人の信仰の力により、物質の強化を為し、社会組織を行服せしめんとする。

ことによつて之を援助する。此の方法によつて五人は東洋の精神をしてその内的に含む諸傾向を自由に表現する機を得せしめる。之が植民政策を動かす偉大なる且つ單一の観念である」（一六

四—一六五頁）。即ち西洋諸国は東洋諸民族に対し東西文化の融合の援助指導を為すために植民地統治をなすのである。

「今日はもはや白人の二重の役割」として厄介視すべきものでなく、文明の神聖なる宣託を果す聖職者の使命たるものである。（Lenkirio）（三三〇）

斯くして西洋諸国による植民政策は東洋諸民族の発達に取り必要且つ有用であり、従つて植民地の長老（文化落後）有力者等は徒らに（佐々に）植民地統治に向つて感情的民族運動の挙にでることなく、寧ろこの偉大なる植民政策の課題即ち東西文化の融合の練合に協力すべきである。

それは内に「足（彩に対する）侵略である」ものから（九一頁、四五六頁）。

東京 文房堂製

、即ち全体の自覚せる機関として作用するに
頼る個別的なる村落区域が村落自治体として
消失すること日本に於けるが如くなり、又内
良好なる一般普通教育の結果として文盲が
られる迄継続しなければならない。この事は、
単に曰く「西洋の指導は土台基礎が建設せ
其に対する「正確且つ明瞭なる答」は尤の如く
であるかとの質問が起るは蓋し当然
指導権は何故に必要であり「何時まで必要
いて言ふ、「然らば東印度に於ける オランダ の

主として農民金融機関及共同組合運動の結
果として人民の負債が消失し、農業に於ける生
産方法の改良により繁栄なる人口と富裕
なる中産階級の出現を見るに至ること等
味する。この点及び政府の宣言に明かなる故に蘭領東印度の要求する
ものは之等の基礎を拵える為めに協力する
数十の労働者建設者であつて、
政治家ではないのである。
建設するこの事は偉大なる有機体の生き
る小細胞を建設するに比すれば問題である。

東京 文月堂製

土人の文化流階級はこの最も困難なる仕事（彼等の営て当面せるこの為めに）構成すべきである。それ成就する為めの心構へが必要である。彼等が眞の愛国心を有することの最善の証明はこれであり、且つ之が政治の子ふる能はざるものを成就するも最も確実にして最も無速なる方法である」（四九三―四九四頁）。

以上で大体本書の性質が解るであらう。それは東西文明の融合を又植民政策の使命なりとする理想主義であり、かつこの理想主義に基いて現実の植民地統治を辯護し、植民地の民族主義的政治運動防壓の根拠となすものとなしてゐるものである。

著者が植民地問題の中心を以て異種文化の接触にありと見たことは正当であり、又異種文化の特殊性を認識して過去の植民政策に於て屢々放言せられたる如き西洋文明を以て無條件に優等であると為す偏見を棄てゐることは尊敬に値する。東西融合問題の重要視及その取扱ひについては故新渡戸博士と著しく近似なる見解である。

東京 文房堂製

あるが、他の比較的有名ならざる二三の日本人著書を引用するに拘らず、新渡戸博士の著書若くは意見に言及する処全くなきは奇異の感を覚する位である。

但し著者の言ふ東西文化の特質は異なるとのみだけが民族固有の特質であらうか。異民族の文化の持質と見なるものも、その少かくとも初分は社会の歴史的なる発達段階の差を示すに過ぎざるものであらうか。従つて東西文化の「融合」の中心点となるところの「東洋社会の動的化」は、東洋社会の資本主義的発達に伴ふて必然的に起り来る現象であり

10—20

、要するに植民地の資本主義化の必然的結果であつて、著者の如き理想主義的植民政策でなくとも、資本主義的植民政策でさへあれば、意識的に成就せられつつある過程である。「東洋的自覚の覚醒は、西洋そのものによりて起されたのであり、且つ西洋によりて日毎に計画的（deliberately）に助長せられて居る」と著者は言ふ（九九頁）、政府の計画的政策の如何に拘らず資本主義国の植民政策下にある植民地社会は資本主義化するのであり、

この著者の資本主義化の結果として植民地人の社会は印から文化的年頃運動が起り来る。

の言ふ処に反して、現実政府の政策は植民地社会の固有の文化を無視し、植民地人の政治的社会的経済的活動の自由を制限する場合にでも、植民地人の社会内部から文化的民族運動が起り来るのである。

次に東洋人社会の近代化に対し西洋の政治的指導者権は如何なる程度に於て必要であるか。東洋の社会が近代国家として未だ自立し得ざる限りこの自立を助くるが為めに西洋諸国による植民地統治が必要且つ有用であるといふのが著者の議論である。而して著者は此点に於てアジア諸民族中日本、シャム、及び支那を一の範疇に入れ、前者は西洋文明を採用することによりて近代的進歩を遂げつつあるものであるが、後者は他の諸民族は植民国指導の下にも芽三国の足跡に倣ひて西洋文化の吸収に努力し、近代的社会の基礎を建設すべきであり、植民国の統治を妨ぐる如き政治的民族運動に従事することは却つて近代国家的地位の獲得を遅らせるものだといふのである。著者によれば日本人、支那人、及びシャム人

蘭領印度、英領印度、仏領印度、支那、フィリピン等を他の範疇とし、前者は自ら

東京 文房堂製

即ち著者は植民地的状態は民族的自覚の缺乏の結果なりとなすのであるが、一面に於て

は英領印度人、蘭領印度人、佛領印度支那人等に比して民族的文化的に優秀なるが故に国家的独立の地位を有し、蘭領印度人、英領印度人等他のアジヤ民族は之に比し文化的実力劣等なるが故に植民地の状態に止まるべきものと為されて居る。而し外国の植民地的支配より独立なることが、其の民族の民族的自覚自立的発展近代国家化を促進する一大刺戟なることを看過して居るのではないか。著者は西洋による植民地の統治は東洋の却って固有の特色を抽出し発揮せしめ、むしろ共に西洋文明の活動的刺戟を之に附加するものであると言ふが、一面に於て外国支配よりの政治的独立を確保獲得する民族がよりよく東洋民族の特殊的なる民族文化の発揮と西洋文明吸収の刺戟となるのではないか。日本が若し欧米諸国の属領となって居たならば、今日の如き民族的発展があり得たらうか。印度は若し政治的に独立して居たならば、今日以上に強盛なる民族となり得たのであるかも知れない。又シヤムが独立国家たる地位を有することはシヤム人の文化が英領及蘭領印

東京 文房堂製

領土を奪ふことも免れたからであるが、英佛西
班牙の国際政治的関係により偶然それ等の国
家に比して優れて居たからであって、英佛西
洋文明の吸収による東西文明の
化の綜合といふことが西洋諸国による政治的
支配なることも無条件的に結び付ける。そこ
から現実の植民地領有競争の獲得論が生れて
来たのである。前に引用したる如く英佛蘭知
蘭による蘭領東印度の統治は東印度人の間に
文化(宣)も無い負債もなきに至る迄継続すべきも
のだといふ。併し文化(宣)と負債の消失に対し、
知蘭政府の統治が最善なるやまたは一二ヒ不二
ア人の自治が最善なりやが問題なのであって
、若し英佛の言ふが如くんば蘭領印度の領有
統治は事実に於て永久的に保護せらるべきで
ある。而して英佛は実に植民政策の一般原則
も論ずるのみでなく、也も以て蘭領印度領有
統治継続を弁護すると云ふ具体的なる政治的
結論を導き出して居る。英佛によれば知蘭の
現実の蘭領印度統治は上述の植民政策の理

想に適合せるものであり、蘭領印度社会の向
上を和蘭政府の努力したる事項を挙げ「こ
れ以上の事を為すことが可能であるか」と見
得を切って居る（三四八頁）。ここに至って著
者の理想主義は現実の理想化に顛落せること
を示す。凡そ現実批判のなき理想主義は真正
の理想主義とは言い得ない。（かくのごとき）現実政治を無
する為めの理想主義は最大の現実主義であつ
て、本著の高貴なる立論を自ら全部的に（再復）顛へ
すものであるまいか。

（若し現実批判のなき理想主義は真正の理想主義とは言い得ないである。）

第二巻『蘭領東印度』は行政制度、司法、
教育、社会組織、政治組織、農業政策、労働
立法、及び租税の八章に分ち、蘭領東印度の
政治的、社会的、経済的諸問題をば第一巻
所論の基本的原則に照し（合）つつ論述
する。原住者社会の固有組織を考察してその
近代化を論ずる点に――その過程の分析に於
て十分の科学性を示しては居ないが――本書
の長所があり、現実の諸政策を理想化して殆
んど事毎に原住者政治的民族運動を非合理

東京 文房堂製

イコル

視する迄に本書の缺陥がある。「全人口の九
八%を占むる土人群の社会的、経済的、及び
知的発達の程度が、和蘭国民から東印度人へ
政権を移譲すべき正確なる標準たるべきであ
る」（二八四頁）と著者は言ふ。而して東印度
の社会的、経済的及び知的発達の為めに和
蘭は指導者たる職責を盡して居り、既述の
如く「これ以上のことを為すことは不可能
だ」と著者は自認して居るのである（第
一巻三四八頁）。然るに同じく蘭領東印度の植
民政策を研究した米国人ウァン・デン・ボッシ
ェ教授は（Amry Vandenbosch, The Dutch East Indies, Its Government, Problems and Politics 1933.）
此書はアンゾリノの著書を尊敬と同意
を以て屢々引用するに拘らず、「教育」
の章には左の如き記述がある。
「東印度に於ける教育発達についての統計
は奨励的でもあり同時に失望的でもある。一
九〇〇年以来為されたる進歩の点から見て発達は極めて喜ばしいものがあるが、

東京 文房堂製

今後の仕事として残されて居るものの見地からすれば、結果は頗る失望的である。――英

しも全印度人口に三年程度の学校を施設す

べきものとすれば、この仕事の三割が成就せ

られただけである。更に六年程度の学校を目

標とすれば十割だ中又七年程度の学校を目

的とすれば一割五分だけの仕事を印度政府

は為したに過ぎない。事実に於て一九〇〇年

以来の教育上の努力に拘らず、~~有日に於~~

~~ても~~絶対数に於て一九〇〇年に於けるよりも

多数の文盲者が存日に満ち

人口よりも急速度に増加した。四年程度の学

校を完了しない児童は永久的に文盲となると

いふハルトッグ委員会(Hartog Commission)の結

論に従へば、文盲に対する~~[illegible]~~兼次郎は殆んど望がな

い(三〇一―三〇二頁)。ヒガカット・アニ(ノ)

の横描く理想的植民政策の実績である。而して横描

は東印度を領有すること一六〇二年以来であ

り、ナポレオン戦争に際し一七九八年から一

八一六年までフランス及びイギリスの領有に

東京文房堂製

15

よつて和蘭の統治は中断せられたが、其の後有名なる強制栽培制度を中心として植民地経営を継續したのであるが、その長年の教育的努力の結果は斯くの如き状態であるに過ぎない。廣大なる蘭領東印度の中今日まで開発せられた殆んど唯一の地域たるジヤバは土地生産力が驚くべく豊富であり、世界有数の富裕地であり、過去一百年に亘り和蘭政府の事実を思へば、今日に至つて尚又資本の致富の源泉となつたのである。従つて住民の教育普及の程度がかくも低きことの原因をば、単に土地生産力の貧弱なる事に基くのではなく(に帰せしめる事は出来ないであらう。)若くは住民の無知に

カツト・アンリへは所謂収奪説(The Drainage Theory)に関し利潤の東印度外に流出することを攻撃する者のは「経済学的誤謬」と論じて、東印度の経済的発達を助けたものは外国資本に外ならないことを記憶すべきだと言つて居る(二七七—二七八頁)。然り、外国殊に和蘭資本の流入によつて東印度の資源は開発せられたのであるが、しかもその開発は廣大なる蘭領東印度の中ジヤバ及びマドラを除きては僅かにスマトラの一部に及べるだけであり、大部分の面積は世界生産及び経済上殆んど閉鎖せられたままである。又その開発せられし地域に於て、東印度の土地生産力と、住民労働の所産たる利潤が東印度内に蓄積せられずして欧洲に回収せられることは資本主義

東京 文房堂製

10—20

10—20

16

経済としては当然のことではあるが、著者の言ふ如き
全人類的崇高なる植民政策の使命を云
々する理想主義からは必ずしも当然の事と
言ひ得ないであらう。又蘭領印度政府の歳出総
を見るは、（一九三二年予算見積）の歳出増加
額五〇四、九六一千フロリン中公債利子は九
九、三千〇十フロリン、官吏に対する年金及
び賜暇給三九、四八九千フロリン、教育費五
四、八六廿十フロリンである（ウアン・デン・
ボツシユ三六三―三六四頁による）に上る。官吏の蘭領東印
度の統治に尽力したる官吏に対する恩給等
が東印度の財源から支出せられることも、資
本主義的植民政策としては当然の事であるが、
著者の揚言する如き、に基く日指導者たる使命
理想主義の遂行の
見地より見れば必ずしも当然の事と言ひ得な
いであらう。要するに本書はその規模が広大
なる東洋社会の特殊性の認識に
於て進歩せる植民政策の標準を示すものではあ
るが、その理想主義が直に現実の植民地統
治を是認し弁護することに急であることが、武器として用ひられて居ることが学問的に惜

東京 文房堂製

10—20

しまれる。本書は矢張り政治家の著書であつて、科学者の著書ではいやうだ。事実著者カト・アンヘリノは蘭領印度に於て総督たりし理歴の人であると聞く。

我が国と蘭領東印度との経済的関係は近年益々密接になり、蘭領印度の社会的、経済的、政治的事情並に和蘭の統治政策についての認識は益々重要となつて来た。而して最古且つ有数なる植民国の一としての和蘭の植民政策研究は学界に取りても必要の事である。

而して和蘭語を以てする植民経済及植民政策に関する著述はやいやうであるが、言語の関係上世人の多く利用する処とならない。その事は正にカト・アンヘリノの指摘する如くである（第一巻四頁）。従つて当時の大著述が英語釋せられて、吾人和蘭語に通ぜざるものの研究に供せられた事は誠に有意義であり感謝に値する事業である。蘭領東印度の研究上本書は上述の如き学問的批判の点を除けば最も詳細にして且つ新しき事実と問題の論説を含み

10—20
東京 文房堂製

第一位の参考書たるに値するであらう。

ついで自ら蘭領東印度に於ける和蘭の植民政策に関しては前記ウアン・デン・ボッシュ "The Dutch East Indies," 1933. がカト・アンヘリノの第二巻よりも新しくある。その記述は平民的で あつて、科学的批判に乏しいけれども カト・アンヘリノに比して簡潔公平であり、又各方面の問題を網羅的に包含して居る。我が国では近頃外務省調査部監修、日本国際協会発行として『蘭領印度民族史』が出版せられ

たが、それの中心的大部分はウアン・デン・ボッシュの弱んどそのまま引き写しである。而かも何等そのものの引用若くは断り書きの附せられていない事は外務省調査部又日本国際協会の名の為めに惜しむところである。

東京 文房堂製